

糸粒体とヒトの生命

日本免疫病治療研究会会長

西原 克成

1. はじめに

本研究会が発足したのがちょうど 5 年前です。発足当時には、免疫病発症の謎の一端が明らかとなり、難病を少しずつ治すことが出来るようになって来ました。その後の 5 年間で病気の謎の解明が進むとともに、多細胞動物の哺乳類がどのようなメカニズムのもとに一個体として統一的な行動が取れるのかも明らかとなって来ました。この謎を解く鍵が一粒の動物細胞の中に数千箇も共生しているミトコンドリアに存在していたのです。この宇宙を構成する法則はエネルギー保存則です。宇宙は質量のある物質と無いエネルギーによって成り立っています。そして質量のある物質は質量の無いエネルギーに究極で変換されます。宇宙に存在する高等生命体は質量のある物質と質量のないエネルギーの両方で出来ています。

地球上の高等な生命体は、太陽の計り知れない巨大なエネルギーの流れと月や地球等の重力や地熱のエネルギーの流れに基づいて、個体内でエネルギーの渦が巡る水車や風車の如き存在です。このエネルギーの渦を巡らせる個体内の物質が、食物から得られた栄養素で、これを分解してミネラルとビタミンと水と酸素と必須アミノ酸と必須脂肪酸の存在の基にミトコンドリアでエネルギー物質を作り出し、このエネルギーにより心や考え、精神や体温や魂という生命エネルギーの渦が巡るのです。この渦を巡らせる場が、哺乳動物の成体では 60 兆箇の体壁系と内臓腸管系の細胞群から成る肉体です。この肉体に常時片時も休まずに作用するのが、太陽から降り注ぐ膨大なエネルギーと地球自体のもつ重力をはじめとするかなりの大きさのエネルギーで、これらが存在しなければ肉体内において一瞬たりともエネルギーの渦は巡りません。そして動物はこの膨大なエネルギーの流れの中で食物と生殖の場を求めて移動し、腸管を蠕動運動して食物を消化吸収し老廃物と食物の残渣と余った栄養の生殖物質を貯留し排出します。この間に、60 兆箇すべての細胞が細胞呼吸をし、新陳代謝し、リモデリングし、老化を克服します。

高等動物と高等植物は、オリジンが共通していて半索類のホヤが両者の源です。従って細胞レベルでの両者の違いは、後者にミトコンドリアの他にクロロプラストがあり、セルロースの細胞壁が存在するだけで、細胞内の原形質や核

酸や細胞小器官は殆ど同じです。両者の大きな違いは、個体を自力で移動するかしないかという、「動くこと」です。動きには筋肉と神経系と移動方向を感知するリセプターが必須で、これらは三者が共役的に発生します。

同じホヤから出発しても、個体を自ら移動することを止めた植物には、筋肉と神経がなくて、光と酸素と水とそれに溶けるミネラル等以外のリセプターはありません。移動しないで葉から光を吸収し、根からミネラル等を含む水を吸収し、光を触媒として遺伝子の引き金を引くことで栄養物質を体内で合成しているのが植物です。ミトコンドリアが、細胞呼吸とリモデリングと新陳代謝のみに働くのが植物です。動物はこれに対して体を移動したり消化吸収したり栄養を分解し代謝しリモデリングし、さらに余った栄養を貯蔵したり、個体の再生の生殖をするのにミトコンドリアで作られる膨大なエネルギーを使います。さらに個体を移動する方向を感知し、計測し計算して手足を動かす早さや数を決めるのにもミトコンドリア由来の膨大なエネルギーを使います。

2. 腸管の受容器（リセプター）

動物が感知して摂取するのは質量のないエネルギーばかりではありません。質量のある嗅いや酸素や栄養もまた感知し摂取します。腸全体が実はこの感知・受容器官です。腸には呼吸の鰓腸と消化吸収の腹腸と泌尿・生殖系の鯡腸の三種があります。この腸管に附属する脳下垂体、上皮小体、胸腺、頸洞、ワルダイエル扁桃リンパ輪、腸管関連リンパ組織（GALT）、副腎はすべてエネルギーとともに質量のある物質や栄養のみならずウィルス・細菌・マイコプラズマ等を受容する器官なのです。受容器ではあっても感知する知覚システムが欠落しているのです。腸管の絨毛細胞も栄養を摂取する受容器です。エネルギーも光や音波のような波動の他に、質量のある物質に備わった引力作用（重力）や、質量のある物質の運動や衝突で生ずる力学作用を感知するシステムも存在します。これが歯と筋肉内に存在する筋紡錘と三半規管です。これらの器官は全て眼・耳・鼻・舌・触覚等の感覚器官と基本的なつくりが同じです。前述した腸管に所属する脳下垂体や副腎、腸扁桃、GALT もつくりは同じで、上皮・間葉相互作用の基に発生します。

高等な生命体は、宇宙からエネルギーと質量のある物質の両者を受け取って、全ての細胞にこれらを分配し、これ等を代謝してエネルギーの渦を回転させながらリモデリングして老化を克服するシステムです。すべての細胞のエネルギーの渦を直接巡らせるための外界からのリセプターが、セリエのストレス学説で発見された脳下垂体—副腎系のシステムです。セリエのいうストレスラーは主としてエネルギーでしたが、実はこの両システムは直接鰓腸に由来しているため腸管呼吸・吸収系のウィルス・細菌・毒性物質をも摂取する有力なりセプターシステムなのです。その窓口がワルダイエル扁桃リンパ輪です。脳下垂体・副腎系の両リセプターから取り込まれたエネルギーとウィルスや細菌は、両器

官が分泌するホルモンとともに血中を巡り、全身の細胞群に播種されます。生体には個体差があり、人により細胞内感染症を発症する器官が異なりますが、ある器官の細胞が細胞内感染症を起こすと、その器官の細胞のミトコンドリアの働きが駄目になり、その器官の働きも弱ります。これが免疫病なのです。

従来の生命科学では、感覚器官は主にエネルギーのみを感知する器官と誤解されてきました。しかし、眼と耳（内耳の聴覚平衡器）と圧力（触覚）がエネルギーで、味覚・嗅覚は質量のある物質が対象です。これ等の感覚器官もまたすべて腸管内臓系器官の附属装置ですから、生命個体とは腸管をこれらの装置で感知した方向に運ぶシステムです。生命体に降り注ぐエネルギーと、腸管や皮膚から入ってくる全ての物質（細菌も含む）とエネルギーを全細胞に分配し、全細胞のエネルギー代謝を直接制御する受容器官が脳下垂体・副腎系だったのです。2006年の今日に至り漸くここまで解明が進みました。これから順を追って、ここまで解明された過程をこれまでの学問の流れと筆者の研究により振り返って見ましょう。

3. 脊椎動物の三つの謎

脊椎動物には三つの謎がある。進化が何故起こるのか？免疫のシステムはどのようなになっているのか？何故高等動物だけが腸管栄養系に所属する造血系が骨髓腔に発生するのか？この三つの謎は実は脊椎動物の進化の過程で起こる同じ現象系の異なる三つの側面である。これを筆者が明らかにしました。脊椎動物にはもう一つ大きな謎が残されています。何故多細胞動物はおびただしい数の細胞から成る多くの器官が統合されて、一粒で生きる原生動物の如く統一的行動が取れるのか？この問題がこの論文のテーマです。

筆者は人工免疫器官として骨髓造血巣を誘導する人工骨髓造血チャンバーと造血性線維関節の歯根膜を誘導する人工歯根を、生体力学エネルギーの負荷によって、未分化間葉細胞の遺伝子発現の引き金を引くことにより開発することに20年前に成功した（図1）。これにより脊椎動物の最大の謎とされる進化を大脇において究明し、「顔の科学」「生物は重力が進化させた」「重力対応進化学」を出版した。その後、免疫の仕組みの謎を大脇で明らかにするとともに、世界中で混迷を極めているわけの解らない免疫病発症の謎を解いた。よもやと思う口呼吸やアイス冷飲食によって喉や消化管（腸）に常在する腸内細菌やウイルスがM細胞から白血球に取り込まれ、これが血行を介して黴菌を播種して、種々の器官や組織を構成する細胞群に腸内菌の不顕性の細胞内感染症を引き起こすことによって発症することを明示しました。

細胞内感染症によって病気が起こるのは細胞内に感染した黴菌によってミトコンドリアの働きが荒廃するためで、個々の細胞内で核とともに生命活動にとって最も重要なエネルギー代謝の働きを担当しているミトコンドリアが黴菌にやられてしまうためです。実はミトコンドリアも太古の時代に真核生物に住み

ついた細菌の一種なのです。身体の生長や発育、健康や病気が個々の細胞レベルで直接的・全面的にミトコンドリアの働きに依存しているということを漸く明らかにすることが出来た。そして「免疫・生命の渦」「究極の免疫力」を著わし、さらに心のありかをさぐり「内臓が生みだす心」と「歯はヒトの魂である」を出版しました。

今日残されている最大の問題は、多細胞生命体のヒトの個体がどのようにして1個体として統一的に制御されているのかという問題です。ここで原核生物と呼ばれる細菌と真核生物とを比較してみましょう。多細胞動物はすべて真核生物で成り立っている。原核生物は二重らせんのDNA一本を持ち haploid と呼ばれ、蛋白質合成系のライボゾームも原核生物に共通している。大きさも小さく、細胞内も単純で小器官は存在しない。ミトコンドリアはこの原核生物が太古の時代に真核生物に住みついて、エネルギー代謝を中心として特殊化したものと考えられる。原核生物がいくら沢山集まっても多細胞動物に進化することはない。真核生物には一粒で生きている原生動物と多細胞でできているいわゆる動物と植物がある。原生動物は原核生物と同様に細胞膜を持ち、原核生物に由来する糸粒体のほか核膜を持つ核と核小体、ゴルジ体や光点、食包の消化器官や排泄器官等いわゆる動物の持つ働きのすべてを持っている。すべての多細胞動物は、真核生物細胞の集まった集合体です。

4. 動物と植物

動物の中で最も由緒ある名門が脊椎動物です。脊椎動物の源は原索類のホヤです。実はこのホヤが高等植物と動物とを分岐する生き物でもある。ホヤにはセルロースの根があり、波に助けられて腸管呼吸をする鰓と腸もある。ホヤの特殊型が自力で腸を動かして呼吸したり消化するのを止めて波まかせにし、皮膚呼吸と皮膚と根の表面からミネラルや微生物の吸収をはじめ、同時に皮膚の細胞内に住みついたクロロプラストによって太陽光線と炭酸ガスと水から炭水化物を合成する事が出来るようになった生き物が植物に進化した。

クロロプラストも原核生物の一種で haploid の遺伝子を持っている。植物は、筋肉・神経系を失って動くことを殆どしなくなり、生きて行くのに必要な栄養と活力（エネルギー）の源の全てを環境の作用にゆだねた生き物です。栄養の主要部を太陽光エネルギーを触媒として環境中（生活媒体）の水と炭酸ガスを使って直接作り出す生き方を編み出したのです。たぶん海中生活中に鰓呼吸を介して原核生物のクロロプラストが体表の細胞に寄生したことから、自前で栄養が体内に蓄積するようになったのがはじまりです。植物も新陳代謝には当然ミトコンドリアがエネルギー代謝をするが、エネルギーを大量に消費する筋肉・神経系が退化消失しているので糸粒体の働きは極端に少なくなっている。脊椎動物は、その源の原腸胚型のホヤが多体節化して円口類型の原始脊椎動物になると、この段階で高等動物の原型のすべてが多細胞の器官としてそろそろ。

一粒の原生動物にも大略の基本器官が細胞内に小器官としてそろっている。これらの小器官のすべては、核の遺伝子とミトコンドリアの遺伝子の相互作用によって形成される。多細胞動物の場合も原生動物と細胞構造の基本はすべて同じで、同じ細胞小器官を持ちながら、様々な働きをする特殊器官の特殊細胞に分化する。そしてその特殊器官がそれぞれの働きを司る脈管と筋肉及び神経細胞群の一体となったシステム、すなわち血液リンパ循環系筋肉神経細胞群、腸管呼吸消化系筋肉神経細胞群、泌尿生殖系筋肉神経細胞群、皮膚筋肉神経細胞群、感覚器官系筋神経細胞群、脳脊髄神経筋肉細胞群と骨格筋肉神経細胞群とこれらの器官や組織をうめる細網内皮系細胞群の8種類の細胞群に分化する。これらの器官を構成する個々の細胞のつくりは原始脊椎動物と哺乳動物とではかなり異なっている。進化の第二革命の脊椎動物の上陸劇を境としてミトコンドリアのエネルギー代謝が飛躍的に増大し、その結果、糸粒体が主導となって身体細胞の殆どの組織のすみずみまで毛細血管が自律神経と血管運動筋肉とともに発生し、体制が爬虫類型と哺乳類型に革命的に変化する。

5. 原生動物と高等動物の糸粒体

原生動物と高等動物の細胞構造の本質的な違いは何かといえば、唯一膜の構造にある。後者は膜と膜が互に結合し、この膜のつながりで細胞分裂が制御されているらしい。原生動物も動く事が出来るから高等動物の細胞も当然膜も細胞自体も動くシステムを持っている。筋肉に存在するアクチンやミオシンには糸粒体の産生する ATP というエネルギー物質が結合していて、このエネルギーで蛋白質がスライドして細胞微小構造が動くようになっている。原生動物細胞の発生と分化も、多細胞動物の細胞間結合も、血管内皮細胞の運動の筋肉神経細胞の脈絡も筋肉神経細胞複合体の発生分化もすべては核と糸粒体の遺伝子の複合作用による。哺乳動物の多種多様の器官の細胞の形は多彩であるが、糸粒体もまた多種多様の形をしている。哺乳動物の一粒の細胞内に 800 から 3000 粒の糸粒体が存在する。糸粒体は、原生動物では当然少なく、多細胞でも脊索動物では少ない。

進化の第二革命の上陸劇で、細胞呼吸が 1000 倍程に飛躍する時に糸粒体の数が極端に増加する。糸粒体の千倍化と哺乳動物の器官の分化および体制の確立が共役している事からも、糸粒体が多細胞動物の分化誘導と個体の統一的制動の中心をなしているらしいという事の見当がつく。糸粒体は、18 億年前に真核生物に寄生した細菌の一種であるから、細菌に有効な抗生物質は何らかの形で糸粒体の働きを阻害する。この視点から考えると、抗生物質の副作用によって各重要器官細胞の糸粒体の主要な働きを知る事が出来る。ストレプトマイシンの副作用で聴覚障害が起こるのは、この抗生剤が聴覚細胞の糸粒体を不可逆的に障害するためである。新抗生物質で気絶すると言うのは、内臓脳のニウロンの糸粒体の働きを止めるからである。腎障害の副作用のある抗生剤は、腎臓の

糸球体（グロメルラス）のメサンギウム細胞の糸粒体を障害するのである。肝障害や造血障害を起こす抗生剤はそれぞれの細胞の糸粒体の働きを阻害しているのである。テトラサイクリン系の抗生剤で骨や歯に生長線が出るが、これは硬組織の造骨細胞とエナメル芽細胞、象牙芽細胞の中に存在して活発に働いているおびただしい数の糸粒体が、この系統の抗生剤で特異的に障害されて緑褐色を帯びた蛍光性のある骨やエナメル質、象牙質をつくるためである。

このように個々の事例を示しただけで、糸粒体が様々に特殊分化した哺乳動物細胞の特徴的な本質的な働きを担当していることが自ずと明らかとなってくる。脊椎動物の進化は、単体節の固着性の原脊類のホヤにその源を発し、多体節化して円口類が誕生してから、一環してエネルギー代謝の増大とともに分化誘導発展がすすみ、上陸を境にして頂点に達する。動物は植物と異なり、体を動かして生のいとなみを続けるから、植物に比して絶大なエネルギー代謝が必要です。この中心を担うのが糸粒体であるから、生命体における進化の中心は動く事つまり重力エネルギーへの対応で働く糸粒体にある。進化とは細胞や器官の時間軸にそった分化・誘導・発展のことであるから、これらの主要因が糸粒体にあるのです。そして進化の外因すなわち環境因子の主要は、重力をはじめとする光や温熱エネルギー、音波や圧力と質量のある化学物質や微生物、寄生体を含む生命個体に作用するすべての物質である。質量のある物質は、肺や腸管を経由して体内に入り、細胞に影響を及ぼすが、質量のないエネルギーは外界から皮膚や細胞膜を通して直接糸粒体に作用してこれを活性化したり弱らせたりもする。

一方、生体内では糸粒体が細胞の生活媒体である血液・体液中に様々なホルモンやサイトカインや生長因子を分泌し、細胞に必要なものを血中に誘導し、血液を介して細胞内に導入するべく身体運動を起こさせる。具体的には、消化管の腸の筋肉内の血糖が下がればこれらの細胞内の糸粒体がこれを感知して筋肉の蠕動運動が起こり、食欲という生命欲が生ずると、内臓脳にこれを知らせる。泌尿生殖物質が満ちて来ると、これらの器官を作る腸管内臓筋肉の糸粒体がこれを感知して、やはり蠕動運動を促し、下腹部の内臓がもやもやとわずく。これが大脳辺縁系の内臓脳に伝わり、排泄のための内臓の（内なる）欲求が一個体の統合行動として表明される。これが心であるから、心は腸管系の細胞内の糸粒体が生み出している。このように個々の事例から帰納法で考えると糸粒体が多細胞生命体の中心的働きを演じていることが浮かび上がって来ます。

6. 動物の特徴器官は何か？

動物は動く事の特徴とするから、動きの中心となる筋肉が最も特徴的装置である。しかし筋肉は、それ自体では動くことが出来ない。動くには神経という外界（腸管内臓の内腔を含む）を感知する装置のレセプターが必須で、これなくしては筋肉は動かない。原生動物の体制を考えれば、細胞膜から細胞内神経筋

肉システムが共役して発生することが解る。原生動物にも化学物質受容体や光を感じずる光点がある。脊椎動物を筋肉－神経系のシステムとして理解すると、太陽エネルギーと地球の引力エネルギーの流れにうかびながら、エネルギーの渦をめぐる動物生命体は、感覚器官リセプターや体細胞が質量のないエネルギーを感受して筋肉系に伝え、質量のある栄養・酸素・ミネラル・ウィルス・細菌・寄生体を感受して腸管筋肉系から血液内に吸収する（図 2）。主として体壁系の器官の感覚器リセプターは主にエネルギーを感知し、身体的全細胞のエネルギー代謝を血流によってホルモンで直接制御する脳下垂体・副腎系にこの情報を伝達する。これにより情報にもとづいた身体運動の準備体制が全細胞にゆきわたる。質量のある物質は、黴菌も含めて外傷や手術を除けばすべて体表上皮か腸管粘膜上皮から侵入ないし吸収されると、殆どは腸扁桃のパイエル板の M 細胞から白血球に取り込まれ、これがリンパ流を介して全身性に情報伝達されるが、やはり鰓腸由来の扁桃や脳下垂体・副腎系を中心として全身の細胞に物質情報として伝達される。この質量のある物質の栄養と酸素と黴菌と糸粒体の協同作用で全身の細胞の生命の渦が、宇宙のエネルギーとともに共鳴してめぐると、身体に心と精神の融合した魂のエネルギーの渦が発生する。脊椎動物に存在する感覚器官には眼・鼻・耳・味覚・触覚（皮膚の器官）があるが、このほかに歯、皮歯の楯鱗、毛と脳・脊髄神経系と脳下垂体、頸動脈洞、大動脈傍体（腰部パラガングリオン）、胸腺、頸洞、上皮小体、副腎、腸扁桃のパイエル板が発生様式から考えると感覚認知器官であり、実際に外来刺激の受容体として働く。感覚器受容器官の定義は何かと云えば、「外来のエネルギーと質量のある物質（寄生体も含む）を受容し認識し身体全体に伝達するシステム」です。上皮細胞と間葉細胞の相互作用で、外来の物質を捕捉する装置です。眼と鼻と聴器は、脳の突出した部分で、眼は光、嗅覚は溶媒中（空気・水）の微量化学物質、聴器は重力作用と圧力、音波、味覚は溶媒中の化学物質、触覚は、温・冷熱エネルギーと圧力エネルギーを担当する。歯と皮歯盾鱗は、質量のある物質の衝突エネルギーと水圧を担当し、摂食・呼吸活動と潮流や気圧の動向に対応しながら脊髄造血系を活性化して外呼吸と内呼吸の糸粒体との仲を取り持つ。脳下垂体、頸洞、副腎は血中の黴菌（ウィルスを含む）と質量のないエネルギーを直接感知し、ホルモンやサイトカインを血中に分泌して全身の細胞内の糸粒体の活動を統制する。胸腺と腸扁桃は、質量のある物質のうち寄生体つまりウィルスや細菌の侵入を捕捉しこれを未分化間葉細胞に渡すと、これが白血球のうち顆粒球へと分化する。これが細胞レベルの認識システムです（図 3）。この顆粒球が全身をめぐる細胞性にウィルスや細菌の侵入を知らせる細胞レベルの情報伝達システムです。糸粒体が太古に寄生した細菌であることから、細菌やウィルスは、ほぼ自働的に体内に入る。寄生微生物が入って来た時に動物細胞内で共存するか毒性を示すか、貪食されるかは黴菌の種類や体調による。これが細胞レベルの消化のシステムです。脳脊髄神経系は、これらの授容器で

把えられた黴菌や毒物等質量のある物質の作用を直接細胞で感授し、一方質量のないエネルギー刺激がレセプターで電気変換され、この電流をニューロンが捕捉する。

7. 西洋思想・東洋思想とセリエのストレス学説

五感を感知する感覚器官のほかに脳下垂体・副腎・腸扁桃のパイエル板、歯と楯鱗を感覚受容器官として考えると、セリエのストレス学説がきわめて容易に理解される。ここで西洋の今日の臓器別医学を東洋思想で統合して考えて見よう。人体は西洋医学では、今日の診療科目のごとく内科・外科で大略五臓と六腑の科名があり感覚器官も眼、耳、鼻、歯、皮科、整形外科、精神科、神経内科、心療内科と色々ある。東洋医学では鍼灸、按法、マッサージと漢方薬で治療する。灸の温熱エネルギーと鍼とあんま・マッサージは脳下垂体・副腎系や皮膚の触覚系のエネルギーによる活性化であり、よく噛んで食べるのが歯の感覚器官系による頭蓋骨髄造血系の活性化であり、冷飲食物を忌避するのが腸扁桃の保護です。東洋思想では全ての感覚器官を活性化することを医学の基本としている。

東洋思想でヒトの病気を観察すると、病気の原因には、エネルギーと栄養と寄生体（細菌）の三種しかない（図4）。これをさらにくわしく観察する。

(1) 感染症 (2) 栄養失調（脚気、壊血病） (3) エネルギーの不適 (4) 移植医学の不適合 (5) 毒物 の五種類しかない（図5）。

セリエは、エネルギーの不適でも病気が起きることを1936年に発見した。この時に彼は「エネルギーとは何か」を把握していなかったために不適當な刺激をストレッサーと名づけた。ストレスとは、生命エネルギーを含めたエネルギーの総称です。生命の喪失も負の生命エネルギーです。この世の中で最も強い負のエネルギーの一つです。暑さや寒冷エネルギー、湿度、気圧、水圧は直接間接に脳下垂体や副腎の糸粒体に作用してその働きを刺激して活性化したり障害して種々のホルモンを分泌する。重力エネルギーも動物に作用する。ことにヒトでは立位、座位で働くから、働きすぎで体を障害する。重力作用は直接細胞に作用するのではなくて血圧の上昇に変換されるので把握されにくいですが、心臓の筋肉の糸粒体と骨髄造血系の糸粒体が疲弊するのです。ストレッサーが適當だと生体は活力が揚がり、不適つまりエネルギーの不適が続くと脳下垂体・副腎系の糸粒体が変調を来し、副腎皮質ホルモンが変調すると種々の障害が生ずる。これを汎適応症候群 (general adaptation syndrome) と言う。これは、副腎の糸粒体の作り出すホルモンが涸渇することです。気圧が低いだけで屈強な若者が高山病などで動けなくなるのは、外気道と腎や副腎が冷えて、脳下垂体と副腎の糸粒体の働きが障害されて皮質ホルモンが分泌されなくなり、僅かな気圧の変化に適応できなくなった時に起こる重篤な障害です。この時ステロイドホルモンが存在すれば助かり、なければ極めて危険です。

8. 訳の解からない免疫病とステロイドホルモン

今日訳の「訳の解からない免疫病」に頻繁に用いられているステロイド療法はセリエのストレス学説に照らして果たして正しい治療法なのでしょうか？正しいステロイド療法の対象となる疾患は、感染症を除外した疾患や障害にかぎられる。すなわち外傷性ショック、局所麻酔剤によるショック、火傷、毒物作用、アナフィラキシーショック、凍傷、高山病、熱中症等エネルギーの不適によるものだけです。つまり毒物の作用と質量のないエネルギーの作用で身体組織や構造が壊れたり（外傷、火傷）細胞呼吸の糸粒体が働かなくなった時だけがステロイド療法の正しい適応症と適応疾患なのです。一方、過労や低体温、腸の過冷却や口呼吸で様々な病気が発生します。過労や過冷却は、エネルギーの摂取の不適を意味し口呼吸や低体温は細胞内のエネルギー代謝の障害を意味する。これらの疾病がまさに「訳の解からない免疫病」だが、これらは果たして純然たるエネルギーの不適による病気なのでしょうか？これらは、体の使い方の誤りで、法則性を持って起こっている病気です。脊椎動物の進化は、ラマルクの用不用の法則に則って起こる。これは厳密に生育の範囲を超えない限りという条件がついている。これを外すと法則性を持って病気になるのです。

訳の解からない日本人の免疫病が今日の如く急増したのは、ほんの 25 年前からです。空前の経済発展で、電化製品による夏冬を問わない体の過冷却と、働きすぎの過労、子育て六つの誤りによる低体温と完璧な口呼吸によって、腸扁桃のパイエル板 M 細胞からウイルスと腸内常在菌が止めどなく未分化間葉細胞に取り込まれ、これが顆粒球に分化すると多量に黴菌を抱えたこの顆粒球が黴菌の運び屋となって体中を巡り、体の様々なる器官の細胞内に黴菌を播種する。エネルギーで障害を受けて元気を失くしている体中の細胞に血液を介して白血球が運び屋となって黴菌をばら撒き散らしているのです。セリエのステロイド療法は、細菌やウイルス感染には原則として絶対禁忌です。その絶対禁忌の細胞内感染症である「訳の解からない免疫病」に、今世界中でステロイドを使っているのです。

9. ステロイドホルモンはどこで作られ、その標的器官は何か？

ステロイドホルモンは、副腎皮質細胞や性腺細胞の糸粒体で作る。ヒトには何百種も存在する。そして標的器官は、糸粒体を持つ全ての細胞内の糸粒体で、闇雲に糸粒体の電子伝達系を働かせて体温を生み出さずに ATP を産生する。自前のものなら、時に細菌やウイルスにも有効だが、合成した 1 種類では、低体温となり細菌やウイルスを殺すことはなくて、ただその産物の有害物質を闇雲に合成した ATP で分解するだけです。

今日ウイルス性の脳炎がわが国の子供に急増し、これに対してステロイドパルス療法が行われている。この子供の脳炎は、口呼吸とアイスクリームで起こ

りやすい病気です。口呼吸では、喉の扁桃が冷えて、この部の M 細胞から喉の常在性球菌が白血球に取り込まれて顆粒球になると、これが扁桃部から頸部リンパ節に移動する時に頸動脈付近を通ると、この球菌に汚染された顆粒球を含むリンパ液が頸動脈に取り込まれて脳に送られる。脳内の脳脊髄液はリンパ液でできており、このリンパの補給は頸動脈による。

血液脳脊髄関門は赤血球と血小板に限られ、核と糸粒体を持つ白血球は脳脊髄のリンパ液には自在に入り込める。こうして口呼吸で黴菌に汚染された白血球によって脳脊髄液が感染する。アイスクリームで腸温を冷やすと、腸扁桃の M 細胞から大量の腸内細菌が顆粒球に抱えられて心臓に達する。肺動脈、肺静脈を経て再び心臓に戻った黴菌と酸素を抱えた血液は、その主流部に汚染した白血球を抱えて、まず右の総頸動脈と右腕の上腕動脈に向かう。血液の汚染が軽症の場合は、右の眼・耳、脳、顔、頸、喉、右腕や右の指や爪だけが感染性の肉芽腫や網膜症、脳炎、爪の変形症や皮膚炎を起こす。

ウイルス性脳炎のステロイドパルス療法では、ウイルスは大量のステロイドホルモンで脳細胞内に産生される ATP によって一度沈静化して症状は消失するが、退院して治ったと思って、再び口呼吸でアイスクリームを食べて低体温になると、直に再発する。今度はステロイドに全く反応せずに CT で脳が半分真っ白になって廃人同様になる。治ったかにみえた時に、体温を 37.5℃と高くして、鼻呼吸を厳密にして、寝相を正し、食べる物と飲み物全てを 42℃にすれば二度と再発はしない。

10. 免疫病を究明する

このように「訳のわからない免疫病」は、過労と冷中毒と口呼吸で大量の腸内細菌を抱えた白血球が運び屋となって体中の皮膚や脳や内臓や神経筋肉、関節や感覚器官の細胞群に細胞内感染症を発症し、その結果感染した細胞群の糸粒体の酸素や栄養が黴菌に横取りされて、その働きが駄目になって症状を発症しているのです。実際に低体温の健常人の血液を 3000 倍に拡大して観察すれば顆粒球が腸内細菌の培養装置となって白血球内で増殖している像が観察される。大量に増殖すると白血球の膜が開いて血漿中に多数の黴菌を放出し、やがて細胞膜が閉じて再び中で培養を始める。免疫病に既にかかっている人でも腸を温め、体温を上げて、鼻呼吸にして黴菌の侵入を入り口で止めて骨休めをすれば、あとは糸粒体に有効なすべてのビタミン、ミネラル、必須アミノ酸、必須脂肪酸、補酵素、ビフィドゥス因子により細胞内感染症を根治させることが可能です。糸粒体が太古の昔に寄生した細菌であることを常に心にとめておいて下さい。哺乳動物にとって糸粒体の次に相性の良い細菌がビフィドゥス菌です。腸内を常にビフィドゥス因子でととのえることが肝要です。

訳の解からない免疫病は、慢性化した風邪症状で発症するリウマチや糖尿病、アトピー性皮膚炎と同種の疾患です。白血球がウイルスや黴菌をかかえてあち

こちらの組織や器官の細胞内に不顕性の感染を起こし、それぞれの器官を構成する細胞が駄目になってその器官の働きが衰えているのです。

しかし病理組織で調べても白血球の細胞侵潤しか観察されません。この組織像こそが白血球が組織や細胞に黴菌をばらまいている像です。皮膚のアトピーがまさに腸内常在菌で起こっている免疫病です。従って訳の解からない免疫病とは、どこにアトピー炎症が起こるかで病名が決まるのです。膵臓に起これば膵炎か糖尿病、腎臓に起これば急性腎炎かネフローゼ (IgA 腎症)、脳に起これば脳炎、小脳と脊髄に起これば脊髄小脳変性症、網膜に起これば網膜症、内耳、中耳に起これば内耳炎、中耳炎、鼓膜に起これば真珠腫、心臓に起これば心筋症、動脈に起これば動脈炎、脳脊髄神経と筋肉に起これば多発性硬化症やミトコンドリア脳筋症、ALS、脊髄小脳変性症、線維筋痛症、甲状腺に起これば高安病や川崎病と呼ばれます (図 4)。

こうして、喘息も糖尿病も網膜症も心筋症も間質性肺炎も腎炎も中耳炎も光彩炎もブドウ膜炎も同じ方法で完治させることが出来る。進行性筋萎縮性側索硬化症もミトコンドリア脳筋症も線維筋痛症も劇的に改善させることが出来る。このように病気の治療を通して、糸粒体がヒトの身体の細胞内でどのような働きをしているのかを知ることが出来る。原生動物と多細胞動物の進化からも糸粒体の働きが明らかとなり、免疫病発症の仕組みの解明と免疫病の治療法からも糸粒体のヒトの身体内における働きを明らかにすることが出来ました。

1 1. 生命とエネルギーと遺伝子発現

地球上の高等生命体は、水や風の流れて巡る水車や風車の如く太陽エネルギーの流れの力を借りて、食物として摂取された栄養物質が酸化燃焼されて生命エネルギーの渦を巡らせて、そのエネルギーで細胞や身体のパーツや全身をリモデリング (新陳代謝) して老化を克服するシステムです。東洋思想では、生命は太陽エネルギーを源として生きていることを実感しています。太陽エネルギーが存在しなければ、高等生命体の生命の渦は瞬時も回転することは出来ない。生命体は質量のある物質とないエネルギーの相互作用の基に太陽エネルギーの燦燦たる流れの中で命の渦を巡らせます。

質量のある物質とないエネルギーが極限で等価となるのがこの宇宙の構成則です。これを仏教思想で色即是空、空即是色と言う。空が質量のないエネルギーで光や時間、空間、温熱がこれに相当し、生命エネルギーでは体温、心、精神、魂、靈魂が空に相当する。眼・耳・鼻・舌・心・意と触覚という仏教の感覚と意識の問題は、五蘊すなわち、色・受・想・行・識として森羅万象を把握する心身の二法とされている。色が肉体と質量のある物質の食物や酸素、受が感覚であり細胞の働き、つまりエネルギーで想が想念でやはり質量のないエネルギー、行とは心の作用で動く筋肉運動で、やはり筋肉細胞の働きでエネルギー、識とは意識のことで、外界と心つまり腸管の働きとを結ぶ窓口の脳細胞の

働きで、やはり質量のないエネルギーです。考えてみると五感のうち鼻の嗅覚と味覚以外はすべて質量のないエネルギーであることがわかります。この世の中が質量のある物質だけで成立しているとする19世紀の唯物思想がいかにもろかったかが改めて思い知らされます。今日の生命科学は、質量のある物質だけで生命が成り立っていると考えている。植物は動くことをしないので、エネルギーが細胞遺伝子の引き金を引くのは主として光合成で、重力への対応もわずかです。動物は動くこと自体がエネルギー現象で、重力作用の基におびたしい反応系がエネルギーによって細胞遺伝子の引き金が引かれて起こっている。こうして進化が起こり、免疫現象が起こり、骨髄造血もエネルギーの引き金で遺伝子発現して発生している。エネルギーは質量はなくても、遺伝子の引き金さえ引けば、蛋白質が合成されたり、ATP が合成され含水炭素も出来る。動物の感覚反応（知覚）は、殆どがエネルギーによる。従ってエネルギー代謝の糸粒体が高等動物の生命現象では最高度に重要です。

糸粒体は細胞外から直接作用するエネルギーを受けても体液中のミネラル・ビタミン・アミノ酸・脂肪酸・補酵素・ピルビン酸を受け取ると遺伝子発現してエネルギー代謝を開始し、同時に各細胞に必須の働きを遂行する。ビタミンB群の完全欠乏では、心筋の糸粒体の働きが停止してシアンの服毒のごとく心停止して狂い死にする。この状態でいくらステロイドホルモンを投与しても糸粒体は完璧に機能停止したままです。脚気と糖尿病はよく似た病気だが後者は糖代謝の解糖障害でピルビン酸の産生が阻害されて糸粒体が働かないのです。膵臓のランゲルハンス島細胞内に黴菌が感染すると糸粒体の働きが障害されてインシュリンが涸渇する。ランゲルハンス島細胞を汚染した顆粒球が黴菌を体中にばらまくと黴菌はところかまわず巣くって網膜にアトピーを起こしたり動脈炎を起こし、血管を閉塞して壊死させる。この黴菌を制御すれば一時にすべての症状が回復する。実際の症例でも黴菌を制御することにより糖尿病が治り視力も回復し壊死巣も見事に収斂しました。治療法はすべて同じです。

1 2. 生命体内の命・糸粒体の働き

糸粒体は生命体内の生命で、これが多細胞生命を一個体としてまとまった動きの出来る統一体として細胞内部から制御する。哺乳動物の個体を一つの国家と考えた場合に、脳や心臓や肺、筋肉や骨や眼・聴器を各共同機関と考え、更に個々の細胞を糸粒体 1000~3000 個を持つ工業共同体として考えて見よう。糸粒体は国家にとって何に相当するのでしょうか？この国家全体に何千兆箇と存在して働いている糸粒体が一人一人のヒトに相当するのです（図6）。

全細胞に共通した遺伝子を持ちながら細胞内に生活し、分裂しながら働いて、細胞種毎に異なる産物を産生し、それぞれの細胞内の小さな糸粒体が独立して、それぞれの小さな役割を支えながら、60 兆箇の細胞を全体として互いに統御しているのです。この糸粒体が生き活きと生活できるようにヒトは生れ落ちてか

ら死ぬまで生活していかなければなりません。循環が滞っても、スポーツをし過ぎて循環が過度になっても駄目なのです。体温が低すぎても高すぎても駄目です。重力作用が過度でも糸粒体が疲れます。

糸粒体の状態がおもてに表れるのが顔色であり、気力・活力です。哺乳動物のヒトの医学・生命科学において糸粒体の働きを完璧に解明すれば、19世紀から20世紀に混迷を極めた生命科学の謎解きは21世紀の今日に至り完璧に解明されるのです。生命進化は今日のヒトの生活においても、日々日常生活において進行しています。19世紀初頭に啓示を受けた如くにLamarckが解明、把握した脊椎動物の進化の「用不用の法則」をきちんと遵守して、ヒトの道を守って生活すれば、免疫病は法則性をもって予防され改善されます。

これ迄の質量のある物質だけに囚われた唯物思想から脱却しなければなりません。質量がないからといってエネルギーを馬鹿にしてはいけません。心や精神や魂や歴史、過去の事象や伝統を実体のあるエネルギーとしてしっかりと心と精神と身体で把握して、太陽と地球のエネルギー総体にもとづいてで調和のある生活を始めましょう。そうすれば地球上の全ての動物の細胞内の糸粒体が生き活きと活動し、細胞が活性化し、個体が躍動すればいきとし生けるものの地上の楽園をつくる事が出来ます。質量のないエネルギーと生命体の命のエネルギーを担う糸粒体に目覚めましょう。生命科学の第一完成期も間近に迫りました。